シャンティ山口 ニュースレター　第96号

発行：2012年4月30日/発行責任者：特定非営利活動法人 シャンティ山口　代表 角　直 彦

連絡先事務局 〒753-0215 山口市大内矢田717　佐伯昭夫　電話/Fax 083-927-4083

ホームページアドレス：http://www.shanti-yamaguchi.com/

東京新聞掲載記事

バイオ燃料 トウモロコシ栽培拡大

タイ奥地 森林破壊

収入増も 地滑り、洪水多発

タイ北部の山岳地帯で、バイオ燃料用トウモロコシの栽培が急拡大し、森林の違法伐採による〝はげ山〟が広がっている。山の保水力が著しく低下した結果、雨期に地滑りや洪水がたびたび起きるようになった。収入が増えた当の農家からも山枯れや農薬の影響を心配する声が出ている。（タイ北部パヤオ県で、杉谷剛、写真も）

●丸坊主の山

ラオス国境沿いに連なる山脈の険しい道を四輪駆動車で奥へと進むと、丸坊主になったいくつもの山の斜面にトウモロコシがびっしりと生えていた。

標高約八百㍍の山あいにある人口約三百人のホイプム村では、村人の多くがトウモロコシの収穫に精を出していた。

一九六〇年代のラオス内戦から逃れて来た山岳少数民モン族の貧しい村。陸稲や野菜を作って自給自足を続けてきたが、タイ北部で五年ほど前から燃料用トウモロコシの種子が出回るようになり、山の様子は一変した。

伐採禁止の国有林だが行政の監視は行き届かず、村人らは次々と木を切り、トウモロコシ畑に変えた。

●痩せる土地

村長のサタワットさん(三四)は昨年、種子百キロと肥料、農薬を計十六万バーツ（約四十一万六千円）で購入。約五万バーツの利益を上げた。

「トウモロコシは確実にもうかる。以前はなかったのに、今や村には車が二十三台、バイクが八十台ある」

種子は遺伝子組み換えにより、特定の農薬を多く使っても枯れないように開発されている。雑草は枯れてもトウモロコシだけ育つため、除草の手間や人手を省けるのが利点だ。

森林伐採が深刻な国境地帯。右端の集落がホイプム村で、山の向こうはラオス。手前は刈り入れを終えたトウモロコシ畑

サタワット村長

それでも村長の表情はさえない。「土地は年々痩せ、数年でトウモロコシの実がならなくなった畑もある」

国境地帯に近い町チェンカムの支援団体スタッフで、農業に詳しいジッポンさん(四四)が言う。「土地が痩せるのは農薬で微生物が死滅するからだ。はげ山は保水力が低い。養分の高い表土が雨で流れると、斜面なので耕し直すのは難しい」

村長も「雨水の流れがすごく速くなり、地滑りや洪水が増えた」と言う。さらに「農薬の体への影響も怖い。みんなトウモロコシをやめて果物に替えたいが、利益が出るまで何年もかかる」と顔をしかめた。

●果物に転換

チェンカムではここ数年の間に、種子と肥料、農薬の三点セットを売る店があちこちに増えた。

元農家の店主アーニットさん(七三)は「農民はもうかるようになったが、農薬が心配」と言う。種子にも農薬が付着しており、袋には「危険」事項として「臭いをかがないように」などと書かれている。

タイ西部ミャンマー国境沿いの山岳地帯でもトウモロコシ栽培が拡大し、はげ山が増えている。ホイプム村では二年余り前から、マンゴーやアボカドなどの果樹に切り替える取り組みを始めた。ジッポンさんは言う。

「今のままでは子どもたちの未来はない。土地を守り、持続可能な農業に変えたい」

バイオ燃料　生物体（バイオマス）の持つエネルギーを利用した燃料。トウモロコシやサトウキビ、キャッサバといった安い穀物を発酵させてアルコールを造り、ガソリンなどの代用にする。持続可能エネルギーの利点がある一方、大量の作物が必要なため、野放図な開墾や農薬の過剰投入を招く恐れがある。